

自由の対立について

阿部一飛（麻布中学校 1 年生）

ABE Ippi (Azabu Junior High School)

はじめに

まず、なぜ自由の対立というテーマに関心を持ったのかというと、僕の学校は自由な校風なので、自由の対立について考えることが多くあるからである。また、自由な校風だからこそ、生徒と教員の自由同士の対立も多く見られる。例えば、生徒の勉強に対して教員はどこまで関与できるのかというところや、生徒同士の喧嘩にどこまで関与できるのかというところだ。

それについて、僕が最近現代文の授業で学習した志賀直哉の『清兵衛と瓢箪』という 1913 年に出版された非常に興味深い物語にも教員や清兵衛（主人公）の父の自由と清兵衛の自由の対立が描かれているため、まずは要約して紹介しようと思う。

『清兵衛と瓢箪』とは

これは清兵衛という僕とほとんど同じ 12 歳の子どもと瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が切れてしまったが、まもなく清兵衛には瓢箪に代わる物ができた。それは絵を描くことで、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している…

彼の瓢箪への熱中具合は烈しかった。それは、ズバリと並んだ屋台店の一つから飛び出した爺さんの、はげ頭を瓢箪と勘違いするほどだった。

彼は古い瓢箪より、新しく、わりに平凡な格好をしたものに興味を持っていた。ある日父の客が来たときも、「もっと奇抜なのを買わんか。」などと言われたが、清兵衛は澄ましていた。父は瓢いじりをしていることを快く思っていないようだった。

ある日清兵衛は見えない場所で、二十ばかりの瓢箪を下げている婆さんの店を見つけた。彼はその中に震いつきたいほどに良いのを見つけ、すぐさま買った。

彼はそれから、それが離せなくなり、学校へも持って行くようになった。しまいには授業中でも机の下でそれを磨いていることがあった。それを教員が見つけた。修身の時間だっただけに教員はいつそう怒った。

この教員は子どもなんかが瓢箪などに興味を持つことが気に食わなかったのである。この教員は武士道が好きな男だった。だから清兵衛の瓢箪には声を震わして怒ったのである。「とうてい将来見込みのある人間ではない。」とまで言った。そしてその丹精を凝らした瓢箪はその場で取り上げられてしまった。清兵衛は泣けもしなかった。

家へ帰ってぼんやりしていると、そこに教員が彼の父を訪ねてやって来た。清兵衛の父は仕事へ出て留守だった。「こういうことは全体家庭で取り締まっていただくべきで……。」教員は清兵衛の母に言った。清兵衛はその教員の執念深さが急に恐ろしくなって、唇を震わしながら部屋の隅で小さくなっていた。さんざん叱言を並べたあと、教員はやっと帰り、清兵衛はほっと息をついた。

まもなく、清兵衛の父が仕事場から帰ってきた。その話を聞くと、急に側にいた清兵衛を捕まえてなぐりつけた。清兵衛は「将来とても見込みのないやつだ。」「もう貴様のようなやつは出ていけ。」と言われた。そして父はふと柱の瓢箪に気がつく、それを一つ一つ割ってしまった。清兵衛はただ青くなって黙っていた。

一方、教員は清兵衛から取り上げた瓢箪を捨てるように、年寄った学校の小使いにやってしまった。小使いはそれを小さな自分の部屋の柱へ下げておいた。

しかし小使いは、その瓢箪をお金に困った時に売ることにし、ある日、それを思い立った。そしたらなんと近くの骨董屋で当時の五十円と

いう大金で売れたのだ。しかし小使いも、骨董屋がその瓢箪を地方の豪家に六百円で売ったところまでは想像もできなかった。

……清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これができたときに彼にはもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢箪を割ってしまった父を怨む心もなくなっていた。

しかし彼の父は今度は彼の絵を描くことにも叱言を言い出してきた。

この作品への考察

清兵衛は瓢箪を通して何かに熱中することの大切さを知っている。そしてそれが実現するための自由の尊さも知っている。だからこそ、自分に対して小言を言ってくる父や教員の自由の尊さもわかる。教員ならば、「教育の自由」。自分が熱中している武士道の考え方に基づいて人にものを教えるという自由の尊さも、清兵衛は何となくわかっている。父ならば、「養育の自由」。自分が正しいと思うことに基づいて正しい道を歩ませるための自由の尊さも、清兵衛は何となくわかっている。そして自分自身の瓢箪に熱中する自由の尊さも自分の生き甲斐として、また心から深く理解している。

清兵衛は尊い自由同士がぶつかっても、何も前進しないことを知っている。だからこそ清兵衛は「抗えない」というより「抗いたくない」のだ。それぞれの自由を理解しているからこそ、父や教員の破壊的とも言えるような行動に抗わず、ただ恐れ、震え、その言動を受け止めているのだ。

この物語の最後には、清兵衛が瓢箪を諦め、絵を描くという新しい趣味を見つけたとある。これは清兵衛にとって大きな飛躍とも捉えられるだろう。それはなぜか。まず、清兵衛はこれまで「瓢箪を手入れする」もしくは「鑑賞する」ということを生き甲斐にしてきた。つまりこれは「受け手」としての生き甲斐である。しかし、「絵を描く」ということは、非常に創造的な行為である。価値を見極めるのではなく、価値を自ら作り出すのだ。これまでは、瓢箪の「外側」を見て清兵衛はそれを批評し自分の「内側」に秘めていたが、それが今度は清兵衛の「内

側」が外の世界に向けて形をもって出ていくのだ。そしてそれは絵を批評する人の元へと届く。かつて瓢箪の批評をしていた清兵衛のような人に。つまりこれは、相手である父や教員を説得しようと正面から向かうのとは違い、自分自身を進化させ、横にずれて進むのではなく縦に飛躍したのである。

最後に「その絵にも父は小言を言ってくるようになった」とあるが、これも新たな始まりなのである。清兵衛はまたこのような状況を打開するべく、飛躍するのであろう。

自由の対立との向き合い方

清兵衛は、父との自由の対立を避けるために、新しく絵を描くという「生き甲斐」を見つけ、自分自身を縦に飛躍させた。清兵衛が自由の対立を避けたのは、お互いの自由を守るためであった。もしそうではなく自分が生き甲斐としているものの自由を奪われるとしたらそれはこの上なく辛いのではないだろうか。

「自由」と「生き甲斐」この二つの関係は非常に深い。どちらが欠けても辛いし、どちらかが欠けるとその大切さを深く再認識する。あらためて「自由」と「生き甲斐」とはどんなものなのか、考えてみようと思う。

「自由」とは、一言で言うと「何にも縛られずに自分で選べる状態」だと僕は思う。そして「生き甲斐」とは「自分の心が向かっていくところ」だと思う。つまり、「何にも縛られずに自分で選べる状態」で最終的に選び取ったのが「生き甲斐」であるのだと思う。

その選び取った生き甲斐というのは一生貫き通さなければならぬ訳ではまったくもっていない。ただ、その生き甲斐がはっきりとわからない人や、変えるのを恐れている人が多いだけだ。しかし清兵衛は、瓢箪を自分の生き甲斐だとわかりつつも自由の対立を避け、自分を飛躍させるために新しい生き甲斐を見つけ、その道に歩み始めた。これこそが、自由の対立との一番良い向き合い方なのかもしれない。相手を納得させるために横の方向に進むのではなく、何度も言うが自分を飛躍させるのだ。相手に合わせるのではなく相手に合わせさせるのでも

なく、自分をもっと高めるのだ。

自分の生き甲斐というのは一言で表すのはとても難しい。しかし清兵衛はそれを自分でわかっている。これはとても凄いことだと僕は思

う。これらのことを踏まえて、みなさんにもぜひ考えてほしい。自分の生き甲斐とは何か、そして今の自分から次の自分への進化とはどんなものなのか。

2025 年 11 月 27 日 受稿